

青柳 睦 教授ご逝去



平成15年撮影

アリゾナ州フェニックスでのNAREGIプロジェクトにて。

略歴

昭和60年 慶応義塾大学工学研究科計測工学専攻修士課程修了
 昭和62年 名古屋大学理学研究科化学専攻博士課程単位取得退学
 昭和62年 分子科学研究所 理論系研究 技官
 昭和63年 米アルゴンヌ国立研究所 博士研究員
 平成2年 工業技術院化学技術研究所 研究員、のち主任研究員
 平成5年 分子科学研究所 電子計算機センター 助教授
 平成14年 九州大学情報基盤センター 教授
 平成20年－平成26年3月 九州大学 情報基盤研究開発センター長
 平成26年12月18日 逝去 享年55

青柳睦君 慶応・理工・化学専攻マイナス一期生 岩田 末廣（分子科学研究所 名誉教授）

青柳さんたちを、私たちは、慶応大理工学部化学科・化学専攻のマイナス一期生と呼んでいる。茅分子研元所長、私、富宅神戸大名誉教授と大峯分子研元所長は、1981年4月に新設された化学科に着任して、物理化学研究室を立ち上げた。電気工学科の学生実験予備室が4人の居室で、茅さんたちは実験装置を組み立てる別室も借りていたが、私と大峯さんは一年以上ここで過ごすことになった。新設の化学科と物理学科の研究と教育体制を速やかに立ち上げるために、旧工学部の先生方は、電気工学科、計測工学科、応用化学科の四年生の希望者を、物理学科と化学科で卒業研究、引き続き修士研究への継続を可能とする措置をとった。青柳さんはその中の一人であった。現京大教授（前分子研助教授）の谷村さんは物理学科の久保亮五研究室に、現九大先導研の友岡克彦教授は、化学科土橋研に参加した。私のところには青柳さんを含めて三人、茅研にも二人の卒研生が参加してきた。青柳さんの学務上の指導教員は、学部時代は計測工学科の渡辺彰教授、修士時代は計測工学専攻の福地充教授であったと記憶している。彼らは、茅研では分子線・レーザー分光装置の立ち上げ、私たちのグループではVAX11/750-UNIX BSD3.2システムの導入の中心になり、二つの研究グループのその後の発展の礎を作った。

青柳さんは、大峯さんの指導で、ポリエンの π 電子状態の研究で卒業論文を書き、大峯さんの分子研助教授着任後は、後任の助手の長村さんの指導で、ブタジエンの励起状態の研究で修士論文を書き上げている。この頃から、分子研の計算機を活用している。その後、彼は、博士課程進学のため、名古屋大学の平尾公彦さんの研究室に移って行った。多分、分子研研究技官時代だと思うが、平尾さんが仲人をした彼の結婚式の祝宴は記憶に残っている。加藤重樹さん、大峯さん、高塚さん、北浦さんなど、その後日本の理論化学をしょって立つ方々がお祝いに集まっていた。青柳さん独特の人徳である。

青柳さんと一緒に「仕事」が再開されたのは、1994年始めに私が分子研に移り、計算機センター長になってからである。青柳さんはその前年からセンター助教授として業務全般を取り仕切ってくれていた。計算機が問題なく運転し続けるための管理業務はもとより、事務局との連携や計算機納入業者との交渉・情報交換を巧みに進めていた。計算機センターの一大業務は、定期的に行わなければならない計算機の入替えである。予算の獲得も大変であるが、「機種選定」も多くの困難がある。当時は、「日米摩擦」による制限もあり、業者間の「駆け引き」を把握しておくことも彼の仕事の一部であった。

分子研レターズ57のIMS caféに青柳さんが書いた「計算化学から計算科学へ」からは、彼が、時代の先端の計算技術を駆使する研究へ強い意欲で研究グループを率いていたことが読み取れる。早すぎた死を悼む。合掌。

青柳さんと焼酎のお湯割り 南部 伸孝（上智大学物質生命理工学科 教授）

青柳さんが1988年に渡米する直前に、出身の岩田研究室（私は学部4年）へ立ち寄られたのが最初の出会いです。一緒にあった奥様の印象がとても強く、青柳さんの影は薄かったですが、とても優しいお顔で微笑むので、気持ちの優しい

方ではないかと勝手に思っていました。まさかその後、分子研にて11年間、さらに九州大学にて4年間の合計15年間、職場の上司および同僚として言葉では言い表せないほど、公私共々お世話になるとは思いもしませんでした。そして、苦難・喜びの時をともに過ごせたことをうれしく思っております。

再会は1993年のことで、私が分子研電算センターに就職した半年後、私の直属の上司となりました。青柳さんは「同じ職場の准教授と助手になるけど、一緒に研究をする必要はないよ。」と、私が独立助手であることを気遣ってくれました。しかし、私は以下のように青柳さんに感銘を受け、一緒に研究することに決めました。当時、毎月、コンピュータ導入会社と「御前会議」があり、管理棟三階の大会議室の丸テーブルに座り、重役の方々の説明を聞いた後、我々の要求を突き付ける、ちょっと傲慢な会議がありました。のちに青柳さんが「もうこの堅苦しい会議は止めよう。」と提案され、重要な時以外はやらなくなったその会議に青柳さんが初めて登場されたとき、お前ら良く聞け！風な勢いで、「そんな提案では何がUNIXだ。あり得ない！」と会社の説明を一蹴します。青柳さんは時代の先を米国で体感し、あるべき姿を示したのだと感動しました。以降、青柳さんはかなり急進的な思想でUNIX化を押し進め、センターの運営を主導していきました。助手の私や高見利也さんはひたすら付いていきました。当時、所長の特別研究費ヒアリングで「特別研究費ではなく特別研究時間が欲しい」と要望したという逸話があります。実際、研究どころではありませんでした。センターの拡大を図って分子研所属から岡崎共通研究施設への移籍も推進されました。

1994年に岩田先生が着任されましたが、青柳さんは「惑星直列だ！」「どうなっているの？」「岩田先生とは共同研究は止めよう。」と言われました。私も当時の助手陣から、岩田先生と共同研究するなと釘を刺されました。分子研は助手も教授や准教授と対等に激しい競争で成り立っていることを実感したものです。1997年にようやく The Journal of Chemical Physicsへ初めての青柳さんとの共著論文を出せたときは感無量でした。論文受理の手紙が届き、青柳さんに電話をして二人でとても喜びました。あの時の喜びは今も忘れません。その後も青柳さんと論文を出すために奮闘しましたが、なかなか出来ず、申し訳なかったと今も思っております。不甲斐ない研究者であった私をよく諦めずに指導してくれました。

私にとって青柳さんとの研究室が理想でした。今も当時を思い出しながら、学生に対応するようにしています。焼酎のお湯割りを教えてくれたのも青柳さんです。

ご冥福をお祈りいたします。



分子研電子計算機センター時代の青柳さん

追悼／青柳先生 高見 利也（九州大学情報基盤研究開発センター 准教授）

青柳先生が分子研から九州大学に移られたのは、ちょうどグリッドプロジェクトNAREGIが動き始めた頃で、青柳先生は異なるタイプの計算をつなぐmediatorというソフトウェアを使った連成計算を研究されていました。この内容については、2008年5月発行の分子研レターズで、青柳先生ご自身の解説「計算化学から計算科学へ」がありますので、ご参照ください。このプロジェクト参加者の多くは計算機科学の方でしたので、分子科学にとどまらず、さまざまな科学分野における青柳先生の幅広い人脈と数値計算法に関する知識は魅力的に映ったようです。実際、このプロジェクトをきっかけに青柳先生は、計算機科学と計算科学諸分野間の調整役、まさに、分野間のmediatorとして活躍されることとなりました。

では、学生にとっては、どんな先生だったのでしょうか。九州大学情報基盤研究開発センターに来る学生は、特定の科学分野を身につけているわけでもなく、中には計算機の基本的な知識さえ持っていない学生もいて、青柳先生も面食らっておられたようです。学生の指導法には、教員自らが指導して「育てる」タイプと、学生が自分で「育つ」のを見守るタイプがありますが、出張で留守がちな青柳先生は後者でした。これは悪く言えば放任主義ですが、じっと待つことほど大変なことはなく、なかなか育ってくれない学生に対して小言の一つも言いたくなるのが普通です。しかし、青柳先生の口から学生に関する愚痴さえ聞いたことがなかったのは、意識的に学生を信頼しあたたかく見守って来られたからだと思います。そうやって育った学生の多くは、社会に出て様々な分野で活躍していますが、病魔が襲わなければ、もっと多くの学生の育っていく姿を見ることができたと思うと、早すぎのご逝去が残念でなりません。